

源流人会だより

ぽたたい

源流のひとしづく

第5号

2005 冬号

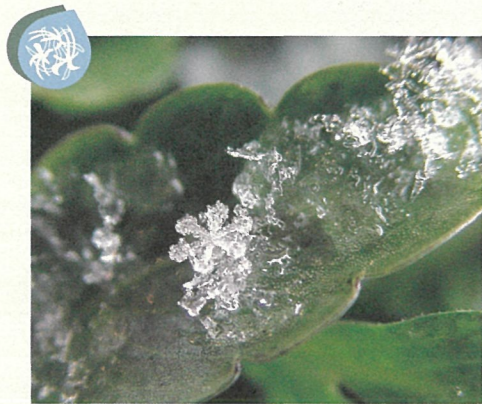
森と水の源流館

住所 ● 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL ● 07465・2・0888
FAX ● 07465・2・0388
URL ● <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail ● genryuu@joy.ocn.ne.jp

CONTENTS

- ・コラム
- ・川上村の主役たち・源流のよみち
- ・調査報告 ～両生類～
- ・川上村見聞録②
- ・源流人会活動報告
- ・交流のページ

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお祈りします。遅くなって申し訳ありません。(^^)



2月の寒波では、森と水の源流館から見える白屋岳も雪化粧。空からははらりと舞い降りてきた雪の結晶は、玄関前のプランターのビオラに腰をすえるとあっといふ間に姿を消してしまいました。冬の天使にあえるのもほんの一瞬・・・。

ぽたたい

源流のひとしづく

冬
第5号

発行所 ■ 財団法人吉野川紀の川源流物語 財団法人吉野川紀の川源流物語
発行日 ■ 平成17年2月発行

TEL 07465・2・0888

PRINTED WITH SOYINK

PRINTED WITH SOYINK

交流のページ

このページは源流人会会員さんや、源流・川上村とつながる個人・団体のみなさんの活動紹介や情報交換の場です。



『森林業が環境を創る』
安藤勝彦 著
コモンズ 発行 189ページ

本の紹介

約20年親しんだ都心の生活を離れ、52歳から林業の生活を始めることになった著者の6年間の体験記です。厳しい山仕事に鍛えられ、その魅力を引きつけられ、豊かな源流で生活する。理屈で森林を知るのではなく、汗して分かり合い、溶け込んでゆく。そんな現場の視点で、山村や森林の問題と今後の可能性が描かれています。舞台は岐阜県川上(かわうえ)村。ここも源流の村です。(横田岳人)



一昨年前、インタープリターのプログラムの中で、雨の三之公におじゃさせてもらいました。カッパ姿で、雨の林(森?)の中を歩いていると、はつぱに雨があたり、あっちでぺこりん、こっちでぺこりん、いそがしそうにおじぎをされていて。なんだか、秘密の会話を聞いているみたいで、わくわくしました。ある雨の日、家の台所から裏山を見ていると、はつぱに雨があたり、あっちこっちでやっぱり同じようにおじぎをしていました。きっと、誰も見ていない三之公でも、あの日のような会話をしているんだろうなあ。目の前の風景と、三之公が重なって、つながって、とてもうれしくなりました。(上田由賀)

源流の村から河口のまちへ ～川でつながることもち～

昨年11月25日、紀の川の河口、紀の川大堰にある「水ときらめき紀の川館」で国土交通省近畿地方整備局和歌山河川国道事務所の主催により「土木の日」を記念し「川でつながる交流会」が行われました。源流から川上村立川上小学校と、河口にある和歌山市立四ヶ郷北小学校の生徒が参加し、大堰など土木施設や河口の川の生き物について学び、両校による発表会がありました。子どもたちは、淡水域にくらす生き物の豊富さに触れ、命の水の大切さに感動していたようです。その後、きれいな水を守るためには「ひとりではできない、みんなで力をあわせよう!」と共同の宣言ができました。

この催しに森と水の源流館も協力参加しました。今後、子どもたちの感動と共同宣言が多くの人々の参加により実現できるよう、両館の機能を発揮させ連携した上下流交流の活動拠点と発展する一歩を踏み出したような気がします。

(太田勝弘：和歌山特派員 (^_^))



水源地の森守募金

募金は次のような活動にあてられます

- 吉野川・紀の川の水について学ぶ本を作成し、流域の小学4年生に配布
- 「源流学の森づくり」事業
- 「水源地の森」の保全を呼びかけるための啓発用看板の製作と設置

郵便振替
00950-2-331164 「水源地の森守募金あて」



年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,000円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育ててゆこうとする会です。源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育ててゆこうとする会です。源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育ててゆこうとする会です。

源流人募集!

仲間を紹介ください

冬の山の楽しみ



季節は秋が過ぎて、冬の到来です。学校から帰るとカバンを放り投げ、すぐさま遊びに行ったことを思い出します。私の住んでいる集落は西河というところですが、12月31日の夕方、集落を流れる「音無川」の川原で“とんど”を燃やします。そのとんどに使う木の切り株を集めるのが子どもたちの仕事になっていて、冬休みに入ると毎日株集めに山に行っていたものです。

切り株は殆どが杉や松で、切つてから何年か経つと腐ってきて足などで強く蹴ると地面から外れます。そしてそれを木で作ったそりに乗せて運んだり、山の斜面を転がして集めました。また、そのときに“みい鉄砲”を作ったり、ちゃんばらごっこをしたり、冬イチゴを竹の筒に入れてつつき、その汁をなめたりして遊びました。ほかに、高い木に巻きついたり太い蔓でターザンの真似をしたり、そりで山の斜面を滑り降りたり、どろどろになって家に帰ったものでした。遊びの中で、少し年上の人からいろんなことを教わったものです。12月30日、そうして集めた切り株と、隣組の各家から集めて回った古い番傘や、いらなくなった燃えるものなどを組み上げ、31日の夕方3時、お寺の鐘を合図に家からたいまつに火をつけて、川原のどんどんに火をつけに走りまわりました。西河地区では4つとんどがたつており、隣の組と、その大きさをどちらが長く勢いよく燃えているかを競いました。夜になると、今度はお宮さんの大きなきんぎょなどに行きました。たいまつをたくさん持って、次々に火をつけ夜の闇の中で遊びました。夜中に、お宮さんから火をもらって帰り、神棚に火を上げ、



▲鉄砲の弾となる杉の雄花



▲竹でつくった“みい鉄砲”



▲紙でっぽうのように飛ばします。

お祈りし雑煮を食べて新年を祝いました。その火は昔は吉野山からもたらつて帰ったようですが、私が小学生の頃は、迫地区（当館が建っている場所）の丹生川上神社上社から火をもらっていました。神社から大津古（今の滝ダムサイト）までは自動車を持って帰り、そこからはいまつに火をつけ、小学校6年生が西河の神社まで主力でたいまつを持って走って帰りました。1番になると年玉として小遣いがもらえ、それが子どもたちの楽しみでしたが、今は西河の神社で火をおこしてその火を家に持って帰ります。（坂口泰一）



▲子供のころは松明を持って走りました

源流人会活動報告

11/7 源流学の森づくり

11/7日 快晴

水温約13度

今日は山のおまつりの日。水源の森の山にもお神酒やお米、畑のもの、海の魚などを供えられました。昔から山に海のものも供えられていたことは、本当に興味深いことです。そしてこの日は、山の神の前に吉野川・紀の川とその源流に熱い思いを抱いておられる、和歌山市民のみなさんの姿もありました。源流学の森の一角にある和歌山市民の森では記念碑の除幕式と、和歌山市民による植樹が行われました。

源流人も、山の神に挨拶した後、源流学の森にて前回の作業の続きを行いました。午前中は除伐作業、午後からは道づくりです。土をトンガでかいてみると、大きなシーボルトミミズが出てきました。光の当たり具合で虹色に光るきれいなミミズです。川上村では“カンタロウ”とよび、ウナギの餌に用いるとよく釣れるそうです。

今回は山仕事のベテラン辻谷館長不在のため、みんな随分と頭を悩ませ、すったもんだしながらの作業でした。途中、和歌山市民の森で植樹を指導してくださった奈良県南部農林事務所の山下さん、金子さんも作業に加わってくださり、時に気のぬける冗談を言い笑いころげながらも楽しく作業が進みました。と、思ったのですが、最後につくった道のできを確かめるため、み

んなで歩いていると、階段が一段崩れてしまいました（涙）。一生懸命つくったのですが、場所によって地盤が悪く、なかなか思うように杭が立ちませんでした。今回のような失敗はとも学びになりました。まさに源流学の森です。山仕事は体力だけでなく頭のいる仕事だなぁと、つくづく感じました。

作業を終え山道を下っていると、シカの糞を運ぼうとしていたルリセンチュウガネがいました。メスは地中へ糞を埋めこんで産卵し、幼虫は糞を食べて育つとのこと。どうやって運ぶのかとじーっと眺めていたら、かたまつたまま動かず、ついでには糞から離れ落ち葉の下に頭を隠してしまいました（尻は隠さず）。残念ながら糞をころがすところは見られず、源流学の森をあとにしました。

実は、本来なら山の神の日は、山仕事をしたいけない日と言われています。川上村ではけがをしたり、たたりがあるというそうです。

今回は4月です。源流学の森で山小屋づくりを始めます。おいしい空気を吸って、未来の森を想像しながら、一緒に汗をかきましょう。

参加者の声

木を切ることは初めてやったけど、教えてもらって最初思ってたより簡単に倒れた。でも、木を切るのは楽しいけどしんどかった。道をつくるのもしんどかったけど楽しかった。（辻井悠希）



▲ルリセンチュウガネ オオセンチュウガネの瑠璃色系で特に奈良、伊勢あたりに分布するものの通称名です



▲中学生の悠希くんも道づくり



▲シーボルトミミズ



▲除伐材でつくったキーホルダー

1/30 源流の新年会

冬ならではの自然の美しさや食べもの、地元の方とのふれあいを通じて交流を深め、何よりいっぱい笑って楽しんで欲しいな、というこで開催しました。

御船の滝までの道中は一時吹雪に見舞われたり、昨夜に降った雨が凍って滑りやすいところもありましたが、子ども達とキャーキャー言いながら滑ったり、雪合戦をしたりと楽しいハイキングでした。残念ながら氷瀑は見ることができませんでした。残念でしたが、太陽の光に照らされて、優しい水の流れ落ちる音の中、そこにかかる美しい虹を見ることができました。本当にきれいだっただけな。...

もりもり館に到着すると、地元のおばちゃん笑顔と団子汁がお出迎え。中平寛司さん提供の鹿肉と、上西規雄さん（バスの運転手）が釣った天然アマゴでからだもぼかぼか、お腹も満足。食後はチーム対抗で水源地の森や館に関するクイズ&ゲームで競い、川上村の特産をお年玉にお持ち帰りいただきました。

みなさん、遠くからおこしいたごき、本当にありがとうございました。また3/26(土)にも集いを企画していますので、どうぞお楽しみに。



▲御船の滝にて

川上村見聞録②

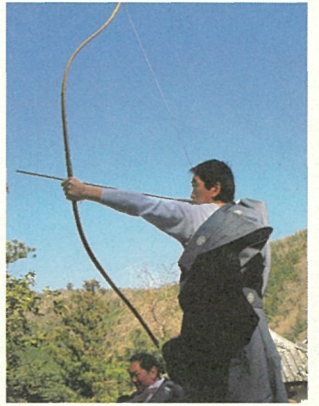
「東川の弓会式」

東川は、吉野町や東吉野村と接する川上村最北東の集落。運川寺の大般若経転読や、十二社神社の放生会、秋祭り・・・と、一年間を通じてたくさんのお祭りがある。今回は、1月9日に行われる弓会式を紹介する。「弓祝式」とも「九日会式」ともいう。

弓会式の始まりは、平安時代にまでさかのぼる。東川で疫病が大流行し、弓の名人東弥惣は、日頃から信仰していた白山権現をますます熱心になつて修業に励んだ。延喜四年(904年)正月9日早朝、ふと彼方に悪魔の化身を見破り、得意の弓矢で退治した。喜んで駆けつけた村人に、弥惣は「悪魔は山の主でこれからも村にたたるかもしれないので、桑弓と蓬矢で東西南北天地を射るように」と教えた。以来代々、1月9日にこの行事を行う



▲十二社神社から運川寺へ



▲寒天の中、勇ましい弓取人



▲的中! 的の裏には「鬼」と書かれている

*このコーナーでは、民俗担当の黄瀬が村で見たこと聞いたことを「川上村見聞録」として紹介していきます。



▲まじない

てきたという。10時ごろ弓取人や神主、区長、8つある垣内の組長らが十二社神社で、出立式として社務所2階にある祓所でお祓いをする。そして本殿につながる廊下を、手渡しで順々に神饌物を供えていく。空気がピンと張り詰めた中を、神主の祝詞が朗々と続き、玉串が奉奠される。こうして氏神様を丁寧におまつりした後、神主を残して一同列を組み、運川寺に向かう。

この弓会式は、神仏混淆の意味でも目を引く。運川寺では住職が待ち、早速本堂で弥惣の供養が始まる。そして区長と弓取人を前に、東家に代々伝わってきた由来書を読み、いよいよ弓射ちが始まる。弓取人3人の内、最年少の者を「正座」と称し、真中に座らせる。高台になった寺の境内から、30mも離れていようか、下の的めがけて計53本の矢が放たれる。

途中、興味深いまじないが行われる。観音堂の前で3本「川」の字形に筋を書き、それとは直角に9本の梅箸を置く。平行に並んだ梅箸の間には、小豆と米をまく。「正座」の弓取人が、弓の弦の間に梅箸をくぐらせ置き換えていく。地元の古老は「これは薬師詣といつて、薬師さんに詣でて矢がたくさんの当たるようにということやろな。」と話す。弓射ちが終わると、的がひっくり返される。さあ「鬼」退治も佳境だ! 神主が登場し「鬼」と格闘する。さも本当に「鬼」がいるかのように的と取っ組み合いをするのだが観客から「ほれ、



▲神主が東西南北天地を射る



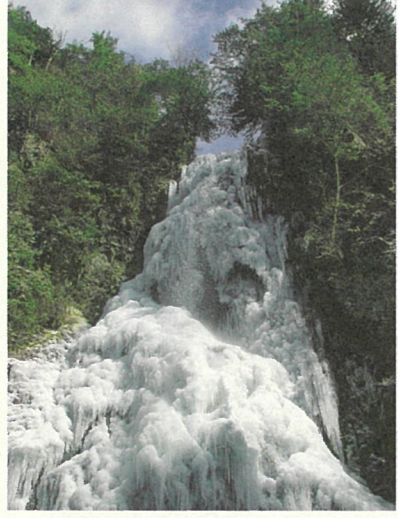
▲「千破美の踊り」的がひっくり返され「鬼」が表れる。神主が鬼を退治。

川上村の雪だるま

「御船の滝」

1月下旬から2月上旬、寒さが一番厳しいときは、御船の滝の最も美しいとき。標高約800m付近に位置し、滝が凍ること有名なこの滝は井光地区にあります。国道169号線を吉野川沿いにさかのぼって車を走らせると、「井光・武木」の道路標識があります。橋を渡って右折、井光川沿いに上ってゆくと、当館より約20分で「もりもり館」に着(日によっては、もりもり館まで行くにもチェーンの装着が必要)。これより先は積雪と凍結のため今年は3/24まで通行止めです。駐車場に車を止めて歩いてゆきましょう。

アイゼン代わりに靴にわら縄を巻いて準備をととのえ、御船の滝まで車道を上ること約1時間。標高が上がるにつれ、川岸や崖にツララや氷づけされた植物など、いろんな氷の芸術が見られます。時折、静寂な空気をふるわす鳥の声に耳をすませたり、ウサギやリス、テンなどの動物の足跡をながめたりするのも楽しみひとつ。そして車道から細い山道へ入ります。木の橋をわたり大きな岩の横をくぐってゆくと約3分。突然、目前に氷瀑があらわれます。滝つぼも雪と崩れ落ちた氷で埋め尽くされている。そんな全て凍った姿が見られるのは冷え込みの厳しい日が続いた時だけ。太陽に照らされキラキラ光る姿は本当に美しいです。



▲御船の滝



▲「ニホンリスの足あと写真下から上の方に向かって走る下の2つが前足、上の2つが後足」

方形の薄い板。くるくるまいて持ち運びでき、お尻の下に敷けばスィーツとすべりだし、スピードもでスリル満点! ソリの値段は350円くらいだったかな? 極寒の川上村ならではの楽しみ、みなさんも来年、ぜひ味わってみてくださいね。

(はやしだ)

源流のまじない

チゴ口淵の人工林

約500年の林業の歴史を持つ川上村。その面積の95%が森林、うち約70%が人工林です。村には日本で一番古いとされる人工林が村有林として保全されており、樹齢390歳の杉は「歴史の証人」と名づけられています。この木に会いに行くには山道を1時間歩かねばならないので、今回は車道から見られるチゴ口淵の人工林を紹介いたします。

当館より上流に車で約10分、「中興」の道路標識を左折し、1分ほど走ると右手に樹齢約300年の人工林があります。巨木の足元には大地に張るその根と小さな虫や草たち。木が過ごした300年の時間と、私たち人間のくらしの変化、そして日本や世界の森林の現状、これからの林業・・・いろんなことを想像し考えさせられると同時に、ただ木々の力強さと美しさに心が動かされます。



▲チゴ口淵の人工林



▲伐採前に樹上に上り枝を切り落とす中平寛司さん

昨秋、平成16年度の「森の名手・名人百人」に再び川上村から林業従事者の中平寛司さんが選ばれました。中平さんは猟師でもあり、水源地の森やその周辺の森一帯をよくご存知です。昨年2月には源流塾「猟師に学ぶ水源地の森」で、森とそこで暮らす獣を中心に、林業のお話も聞かせていただきました。「もう、寛ちゃんほどの人は出てこない」と言われるくらい、カモシカのように崖も夜の森も駆けぬげる、そんな山男さんです。

「森の名手・名人」は奈良県ではこれまで5名が選ばれましたが、そのうち3名が川上村出身であることは、本当にうれしいことです。500年間森を育ててきた村人、そしてそんな人もまた森に育てられてきたのです。しかし、戦後は村で千人いた林業従事者も今は百人以下。若者と言われる人も50歳を越え、後継者を育てようにも仕事がありません。

みなさんの生活に杉や桧は形を変えて生きていますか?

この調査は、吉野川・紀の川の源流部に位置し、川上村が購入し、保全している原生林「水源地の森」の保全を進めるための基礎調査として、この森と水の源流部に生育・生息する動植物の現状を把握するための基礎データを得るものです。

期間：2003.11～2004.3
調査地域：水源地の森
(全740haのうち382ha)
調査項目：植物・巨樹・哺乳類
鳥類・両生類
は虫類・魚類
底生生物・陸上昆虫類

西川 完途 (京都大学大学院 人間・環境学研究所 助手)

水源地の森は、これまでどのような両生類が生息しているのかよく調べられていませんでした。表1に今回の調査で確認された種を示しています。短い調査期間であったこともあって、確認種数は多くないですが、周辺地域からの報告が少ない種なども発見されました。一番多く見られたカエルは、ナガレヒキガエル(写真1)とタゴガエルで、イモリとサンショウウオの仲間では、アカハライモリとブチサンショウウオの個体数が多いようです。確認された種のうち、いくつかを紹介します。



ナガレタゴガエル(写真2)は、奈良県で5地点目の発見になります。

2月の調査で見つかり、卵も確認されました。1990年に新種として記載されたこと、近縁種タゴガエルとの区別が難しい場合のあること、繁殖期が2-3月と山間部の調査が難しい季節にあたることなどから、これまでよく調べられていませんでしたが、最近になって、新たな分布情報が増えています。水源地の森では、明神谷と馬の鞍谷で発見されました。

モリアオガエルも、紀伊半島では4地点でしか見つかっていない種です。本種は、木や草の上に泡状の卵塊を産みます。この卵塊はクリーム色で目立つものですが、聞き込み調査でも情報が集まらなかったことから、水源地の森においても個体数は多くないと思われました。今回の調査では1地点でしか見つかりませんでした。

サンショウウオの仲間では、ブチサンショウウオ(写真3)は調査地の全域に広く生息しており、オオダイガハラサンショウウオは源流部で繁殖していることが確認されました。オオダイガハラサンショウウオは最初に川上村で発見された種で、村内では条例によって保護されています。

川上村は、吉野杉で有名な植林の盛んな村ですが、先人の知恵から現在の水源地の森にあたる地域は原生林を伐採せずに残してきました。両生類は、「両」方で「生」きる動物、すなわち水陸の両方がないと生きていきません。両生類が健全に生息できる環境は、水陸の環境が共に良好な状態で維持されていることを示しています。周辺の地域で発見されていない種が見つかったということは、水源地の森にそのような健全な環境が残されてきたからだとも言えるのです。

■調査時期

調査時期	調査実施日	選定理由
冬季1	2002年12月14～15日	サンショウウオ類の越冬期であり、これらが比較的確認しやすい時期である。
冬季2	2003年3月17～18日	ナガレタゴガエルの繁殖期にあたり、本種の繁殖状況を確認するため。
早春季	2003年3月29～30日	オオダイガハラサンショウウオの繁殖期にあたり、本種の繁殖状況を確認するため。
春季	2003年5月6～8日	多くの両生類が繁殖期を迎える時期であり、これらが比較的確認しやすい時期であるため。

*他、2～11月の他の調査時にも両生類を確認している。

■調査方法

確認方法は、直接観察によって生息種を確認する目視観察、および鳴き声の聞き分けによる方法を併用した。またルート沿いの倒木や石を起こし、これらの上に潜む両生類の確認にも努めた。



写真1. ナガレヒキガエルの雌。
水源地の森では沢筋に多く生息している。



写真2. ナガレタゴガエルの雌。
三之公川産(撮影：井手泉氏)
近畿地方では分布記録が少ない。



写真3. ブチサンショウウオの幼体。
時期が良ければ登山道沿いでも見られる。

表1. 水源地の森の調査において確認された両生類
(*は鳴き声のみの確認)
和名は、日本爬虫両生類学会による標準和名に従った。

有尾目	オオダイガハラサンショウウオ ブチサンショウウオ アカハライモリ
無尾目	ナガレヒキガエル ニホンアマガエル* タゴガエル ナガレタゴガエル カジカガエル モリアオガエル シュレーゲルアオガエル

新年あけましておめでとうございます

森と水の源流館も3回目の新年を迎え、新年早々には5万人目の来館者を数えるにいたりました。一年の計は元旦にありと昔から言われるとおり、一月は行事の多い月です。元旦はまず地元の氏神さんに参ります。2日は仕事始めの日で(職業によって行事も異なる)、山の仕事に従事する人は暦の上での「明の方」へ行つて、その場所で雑木を1本伐つて帰り、家の庭木にくくりつけることをしました。大工さんは気を削る「チョンナ」という道具と差し金を、鍛冶やさんは両戸や入口を開ける「カマ」とカマを作つて祭りしました。明の方とは恵方(歳徳神の位置する方位)のことです。一年中の大吉方位とされます。最近、大勢の人でなじみのある明の行事は節分です。今年の明は西南西で、巻寿司を丸かじりする時に明の方を向いて食べます。

私の仕事始めは正月七日の山之神の日に、水源地の森の山之神さんを祭ることから始まります。昔から山之神は寒に入り、一年中で一番寒い時期にあたるので、雪の多い荒れた天気であったり、一年中ではいられません。その裏には地球温暖化が進んで地球上の気象が異常をきたしていることは、昨今のいろいろな災害を見てもわかります。温暖化の原因をつくつていっているのはまぎれもない人間の仕業です。文明が栄えて人類が減びるという言葉がありますが、まさに地球がその方向に進んでいることは間違いないと思います。人間によってつくつた悪玉は人間によって善玉にかえねばならない。そのため今われわれ人間は何をすべきかをしっかりと見極めて辛抱よく取り組んでゆく年にならなければならないと思っています。

今年も森と水の源流館の活動にご協力、ご支援賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

(館長 辻谷達雄)

